

ideaflow：知財×AIによるアイデア共創プラットフォームの総合分析

株式会社知財図鑑が提供する「ideaflow（アイデアフロー）」は、AIを活用して特許情報から新規事業アイデアを創出する革新的なプラットフォームです。日本の知財活用とイノベーション創出を加速させる可能性を秘めたサービスの詳細を調査しました。

サービス概要と背景

ideaflowは、公開特許情報から未来型の事業アイデアを瞬時かつ大量に創出するWebサービスです。2024年6月25日に発表され、当初は特許を保有する企業や大学を対象にベータ版が提供されていましたが、2025年2月27日に一般向けの無料プランを含む製品版として正式にリリースされました^{[1][2]}。

日本は年間30万件を超える特許を取得する特許大国ですが、そのおよそ半数が事業利用されずに収益を生み出せていないという課題があります^[3]。ideaflowは、この「休眠特許」の活用を促進し、新たな価値創造を目指しています。

株式会社知財図鑑の共同代表である荒井亮氏によれば、「知財という先端技術をAIの力でわかりやすく翻訳し、メディアを通じて発信することで、知られていなかった技術に誰もがアクセスできるようになる」という理念がサービス開発の背景にあります^[3]。

特筆すべきは、ideaflowが大阪・関西万博での住友館（住友グループ）が展開する共創プロジェクト「ミライのタネ」にも技術提供しているという点で、すでに日本の重要なイノベーションプロジェクトに組み込まれています^{[1][2]}。

主な機能

ideaflowの主要機能は、特許情報の活用からアイデア創出、共有、発展までをカバーする包括的なものとなっています：

1. 特許の要約

公開特許番号から、AIが難解な特許内容を瞬時に平易な言葉で要約します^[3]。専門的で理解しづらい特許文書を誰にでもわかりやすく翻訳することで、アイディエーションの土台を構築します^[4]。特許情報をビジネス領域で活用するための重要な最初のステップとなっています。

2. 事業アイデアの提案

特許情報と、ビジネスを検討したい産業分野を指定することで、AIが未来の事業アイデアを作成します^[3]。飛躍的なアイデアから現実的なアイデアまで幅広く方向性を示す機能により、ユーザーの期待値に合わせた多様なアイディエーションが可能です^{[3][4]}。

3. 事業アイデアの可視化

生成されたアイデアは「価値・ターゲット・長所・短所・リスク」など多角的な観点で記載され、新規性・市場性・実現可能性についてAIが自己評価を実施します^[3]。また、利用シーンを描いたビジュアルも同時に作成するため、アイデアの具現化イメージを直感的に把握することができます^[3]。

4. 部門を超えたコミュニケーション

作成したアイデアは、同じチームに所属するメンバーとの間で共有され、「いいね」機能やコメント機能を通じて自由に議論を展開できます^[3]。これにより、研究開発部門、知財部門、事業部門など、部門の壁を超えたコミュニケーションを促進します^[3]。

5. AIエージェントとの対話機能

作成したアイデアをベースに、AIエージェントとチャット形式で対話することができます^{[1][2]}。用意された質問だけでなく、自由に質問を投げかけることも可能で、アイデアのさらなるブラッシュアップに役立ちます^{[1][2]}。チャット履歴はスレッド単位で記録され、過去の検討内容を参照できる仕組みとなっています^{[1][2]}。

6. 公開機能

通常はチーム内でのみ共有されるアイデアを、オプションで広く一般公開することができます^{[1][2]}。これにより、外部のユーザーにもアイデアを共有し、潜在的なコラボレーションパートナーとの接点を生み出すことが可能になります^[4]。トップページでは、毎月のトレンドや社会課題など、テーマに沿った「特集」が表示される仕組みになっています^{[1][2]}。

料金プラン構成

ideaflowは、個人のユーザーから大企業まで幅広いニーズに対応した3つの料金プランを提供しています：

1. Freeプラン（無料）

- メールアドレスでのアカウント登録で誰でも利用可能
- 月10件（年間120件）のビジネスアイデアを作成可能
- 作成したアイデアは誰でも探索できるトップページ上に公開される [\[1\]](#)[\[2\]](#)

2. Proプラン（有料）

- 法人向けプラン
- アイデア作成数やチームメンバー数の上限が拡充
- 7日間の無料トライアル期間あり [\[1\]](#)[\[2\]](#)

3. Enterpriseプラン

- 本格的に利用する企業や大学向けの上位プラン
- カスタマイズ対応も可能 [\[1\]](#)[\[2\]](#)

無料プランの提供により、個人や小規模企業でも特許情報を活用したアイデア創出が可能になり、知財活用の裾野を広げる試みと言えます。

企業の新規事業支援としての価値

ideaflowは特に以下の部門や業務に対して高い価値を提供します：

新規事業部門への価値

企画ボリュームを飛躍的に増加させることにより、事業案の質を高めることができます[\[1\]](#)[\[2\]](#)[\[3\]](#)。従来のブレインストーミングでは得られなかった多様なアイデアを大量に生成することで、新規事業開発のシード探しを効率化します。

研究開発部門への価値

研究者や開発部門の担当者にとって、自社の研究技術が未来にもたらす可能性を拡張する視点を提供します^{[1][2][3]}。通常は気づかない技術の応用可能性を発見することで、研究開発の価値向上につながります。

知財部門への価値

従来の事務型作業から、より戦略的なクリエイティブ業務へと知財部門の人的リソースをシフトさせることが可能になります^{[1][2][3]}。知財を単なる権利保護の対象から、ビジネス創出の源泉として活用する文化醸成に貢献します。

部門間連携の促進

研究開発、事業部、知財部門の連携を強化し、部門の壁を超えたコミュニケーションを促進します^[5]。異なる視点や専門性を持つメンバーが同じプラットフォーム上でアイデアを共有・発展させることで、より実現性の高いイノベーションが生まれやすくなります。

導入事例と利用者の声

現時点での具体的な導入事例としては、以下の企業での活用が確認されています：

カプコン

株式会社カプコンの知的財産部部長である奥山幹樹氏は、「AIによる妄想アイデアを起点に人が議論していくことで、企業の成長や社会課題について向き合うキッカケにもなります」と評価しています^[5]。同社では「企業の成長に必要なビジネスアイデアを創出する文化（コミュニティ）を社内に醸成していく」ことを重視しており、ideaflowがその一助となっています^[3]。

東洋製罐グループホールディングス

東洋製罐グループホールディングス株式会社のイノベーション推進室も、ideaflowの利用企業として言及されています^{[2][6]}。同社のイノベーション推進室イノベーション推進グループリーダーである竹内友里氏がideaflowに関するウェビナーに登壇予定であることから、積極的な活用が推測されます^[6]。

その他の利用者の声

ピクシーダストテクノロジーズの本本大介氏は、「ideaflowが、スピードを命とするスタートアップの成功率を高めてくれるものと期待しています」と、スタートアップにおけるideaflowの可能性に言及しています^[5]。

今後の展望

ideaflowの今後の展望としては、以下の点が挙げられています：

グローバル展開の推進

国際的な知財活用を促進するためのグローバル展開が計画されています^[6]。すでに世界最大級のテクノロジー見本市「CES 2025」への出展が決定しており、グローバル企業や行政機関、投資家に向けて日本発の知財×AIプラットフォームを紹介する予定です^[7]。

個人ユーザー層の拡大

2025年2月の製品版リリースで無料プランが導入されましたが、今後さらに個人ユーザーへのサービス提供を拡大していく方針が示されています^[8]。これにより、知財活用の裾野を広げ、より多様なアイデア創出を促進することが期待されます。

AIの進化に伴う機能拡張

AIの技術進化に合わせて、さらなる機能拡張が予定されています^[9]。特にAIエージェントとの対話機能の強化や、アイデアの分析・評価機能の高度化が期待されます。

知財活用文化の醸成

知財図鑑の共同代表である荒井亮氏は、「失われた30年」の間に生まれた休眠特許の掘り起こしや既存特許の技術移転によって、オープンイノベーションを連鎖的に促進し、日本の新しい経済成長を実現するビジョンを持っています^[3]。ideaflowはその実現のための重要なツールと位置づけられています。

結論

「ideaflow」は、AI技術を活用して知財情報から新規事業アイデアを創出・発展させるプラットフォームとして、企業の新規事業開発や新商品・サービス開発を支援する大きな可能性を秘めています。

特許を単なる権利保護のためのものから、新たな価値創造のための資源として活用する文化を促進し、日本の産業競争力強化に貢献することが期待されます。

今後、無料プランの導入による利用者層の拡大やグローバル展開の進展によって、更なる発展が期待される注目すべきサービスと言えるでしょう。

*
**

1. <https://chizaizukan.com/news/1ZVnQfq7gmv7HGL1LlgbJe/>
2. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000041.000052909.html>
3. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000036.000052909.html>
4. <https://konel.jp/works/ideaflow/>
5. https://note.com/arata_suehira/n/n352789caad2d
6. <https://mainichi.jp/articles/20250304/pr2/00m/020/827000c>
7. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000039.000052909.html>